

## 舟遊で、水辺から街を変える

—NPO 活動、最近の足跡—

須永 俣子（NPO 江東区の水辺に親しむ会 理事長 関東ブロック）

### 江東区の水辺の現状

江東地域には、江戸開府以来開発され続けてきた、内部河川、運河や掘割、そして東京湾と、多くの水辺がある。昔はこれら水辺沿いが河岸地として利用され、商店や蔵の立ち並ぶ人々の暮らしと密接に結びついた、活きた水辺であり、独特の風景を持っていた。

震災や戦災などで街は壊滅的な打撃を受けたが、水路の骨格は残された。高度成長期には大規模工場が水辺沿いに並び、荷物の搬出入の船が行き交う姿が、最近まであった。しかし河川が工場や生活の排水を担うドブと化し、河川の水質汚濁が進んだ。川のイメージはどんどん悪くなり、人々は水辺から遠ざかった。背中を向けた建物が水際まで迫り、治水のための高い護岸が築かれたことも要因となった。

今は水面に船の姿を見かけることも少なくなり、川沿いの風景も様変わりしている。水辺の工場がマンションに変わり、地域資源である水辺を活かしたいと自治体の整備方針も親水を考慮するものになった。水質など自然環境も、好転してきている。

### NPO の活動と役割

こうした状況を地域に理解してもらい、水辺から街づくりを考えたいと「NPO 江東区の水辺に親しむ会」を立ち上げ、平成 12 年から活動を始めた。イベントによる街の賑わいの創出、リバーツアーによる水辺の街の個性アピール、行政や大学、地元商店街、住民などとの懇談会による水辺と緑を活かした街づくりの方策の検討、河川塾開催による水辺についての学習などを行ってきた。

小名木川の真ん中に位置するクローバー橋とその周辺で毎年 9 月に開催している水彩フェスティバルは、平成 18 年で第 7 回を迎えた。和船や動力船の乗船体験を中心に、オープンカフェ、模擬店、展示など盛りだくさんの企画となっている。



毎年 3 月から開催のさくら祭りは、今年で 3 回目を迎えた。避難訓練も兼ねていることを参加者は意識していないが、災害時の水辺利用も意識している。広域避難場所として指定されている東京海洋大学への船の便も用意している。水辺が避難路としても有効なことから、平常時に使うことが重要と考えてのことである。

NPO はテリトリーにかかわらず活動できるため、水辺の活動に適していると考える。地域住民へ体験の機会を作ることで、親しめて利用しやすい水辺づくりについての意見が、地域から出てくるようになることを期待している。

### リバーガイドの養成

多くの人々に、水辺からの景観や街についての意識を高めてもらうため、昨年度から江東内部水域におけるリバーツアーを実施している。



ツアー実施の前に、江東区東大島文化センターの協力を得て、リバーガイド養成講座を開講した。まずガイド自身を、水辺の魅力の理解者とするためである。

講座は、平日の昼間に開催することにした。社会経験が豊富なリタイア世代の社会参加を促すことも出来ると考えてのことだった。25 名の募集に 100 名弱の応募があり、急遽 35 名に増やしての実施となった。

江東区船番所資料館の学芸員による歴史説明だけでなく、昔の自然環境、現在の環境、水質調査実験などの環境教育、実際に声を出しての発表やそれについてのお互いの評価、修正などの話し方の実習を行うようにした。各班 6 名程度の班分けをし、相互に地域の素材を調べ評価しあうことで、班内のコミュニケーションを高めてもらう効果も狙った。

最初はとまどった受講者が、徐々に経験を交えた個性あるガイドができるようになった。自分で調べそれを発表するということを繰り返すうちに、それまで全く水辺に関心を持たなかったという人達が、まず水辺の理解者となった。修了者の中からは是非ガイドをやりたいという意志を持った 7 名が、現在リバーガイドとして活躍している。

## リバーツアーの実施

昨年度は毎土曜に高橋、クローバー橋、船番所前の3つの防災船着場を拠点に、ツアーを実施しガイドによる歴史や自然環境などの説明を行った。

小名木川沿いは高度成長期には、舟運のための地の利が良いことから、さまざまな産業が発達した。そのため地下水の汲み上げによる地盤沈下が起こった地域である。現在小名木川の東側は洪水への治水対策として水門で仕切り、感潮河川である荒川や隅田川の平均干潮面から-1mに水面を下げている。

ツアー最大の見所は、小名木川のちょうど真ん中に設置された扇橋閘門である。水位を下げた池状態の内部河川には、この閘門によって円滑に船舶が入ることが可能となっている。水門内の前扉、後扉2つの扉の開け閉めによって水位を調整しているのが扇橋閘門で、荒川の出口には荒川ロックゲートがある。

参加者はこの扇橋閘門を船により通過することで、工場の地下水汲み上げによって引き起こされた地盤沈下による環境変化を、体験することができる。



更に平成18年度からは、小名木川の東部分に東京都による護岸改修工事が進められており、これは現在も継続して行われている。街と水辺を切り離していた護岸を切り取り、テラスを設けることで人々が水辺に近づきやすくなるためである。

「塩の道」として開削された歴史にちなみ、石積み風の護岸演出が施された。昔の治水重視の護岸改修に対する考え方や、最近の親水性を高めた護岸作りに対する考え方の両方を見ることができ、参加者が水辺の景観や機能についてより理解を深めることができるエリアとなった。

## 小名木川リバーマップの制作

リバーツアーをより楽しめるものにし、いっそうの賑わいと呼び込みたいと、ツアーの参加者に配布するマップも作成した。

地元の名所や楽しいスポットを紹介したイラストマップを中心に、ロックゲートや扇橋閘門などの解説、ツアーのあとに地元でお茶や食事が楽しめるお勧めのお店まで掲載することにした。お店やスポット情報については、「水辺

に親しむ会」のメンバーが手分けして各店舗に取材、写真入りで細かい情報を掲載した。その他、小名木川歳時記として小名木川とその周辺エリアの年中行事も掲載、小名木川周辺の地域を理解していただくものにした。

イラストは、江東区の風景を水彩画で描き、地元タウン誌や機関紙などのイラストを数多く手がけている、江東区在住の画家に依頼した。小名木川周辺を実際に歩いてもらい、川や町並みを細かくスケッチしてもらったため、特徴のある建物などが書き込まれ、船を降りてからの散策にも楽しみながら使えるものとなっている。

完成後はツアーの乗船客に配布された他、リバーガイド養成講座でも協働した東大島文化センターをはじめ、中川船番所資料館、森下文化センター等の各センター、掲載した各店舗での配布を行った。印象的な絵と地元の魅力的なスポット紹介を組み合わせることで、「もっと街を歩いてみようと思った」「地図の中から、自分の家の絵を探すがおもしろい」といった声も出ている。小名木川の新しいガイドマップとして、地域の人だけでなく、ウォーキングなどの来街者にも幅広く役立てて欲しいと考えている。

## 将来に向けて

リバーツアーについては、風景やガイドの対応などについてアンケートで聞くようにした。

風景についての感想は、鳥などの生き物の存在や水質の透明感の評価したもの、視界を遮る高い護岸については批判的であった。水辺の現状を理解し、魅力ある水辺がどうあるべきかを考えるきっかけづくりになったのではないかと考えている。

リバーガイドについては、聞きやすい、分かりやすい、内容が豊富で細かなところまで教えてくれると好評だった。ガイドの中には、鳥や魚の説明のために自分で描いた絵を用意する者もあり、こうした説明は特に好評だった。川は知れば知るほど、水辺の奥深さと魅力にはまると、ガイドが感想を漏らしていた。水辺にはまった人々を増やすことが、魅力ある水辺づくりへの大きな力になると考えている。

河川の役割として望むことについても聞いてみた。風景、散策、通勤・通学といったものが挙げられていた。回数やルートを増やして欲しいというものもあった。

料金設定についても質問し、1,000円程度が妥当であろうとの結果だった。水辺からいったんは消えた舟運だが、リバーツアーの可能性を感じさせる意見だった。

今後北十間川に面して、押上に第2東京ターミナルが建設される。荒川ロックゲートが完成したことにより、運河をたどって南北へ大きく周遊することも可能になった。水辺は使ってこそ活かされる。特に水辺の重要な役割、災害時における減災についても、普段からの利用が重要と考えている。緑豊かな空き地が水辺に確保され、防災上の安全度が高い街は景観上も美しいはずである。自然の少ない都会で自然を感じさせ、ゆったりと時間の流れる水辺の魅力の理解者を増やし、水辺からいい街をつくっていけるように、今後もこの事業を継続していきたいと考えている。